

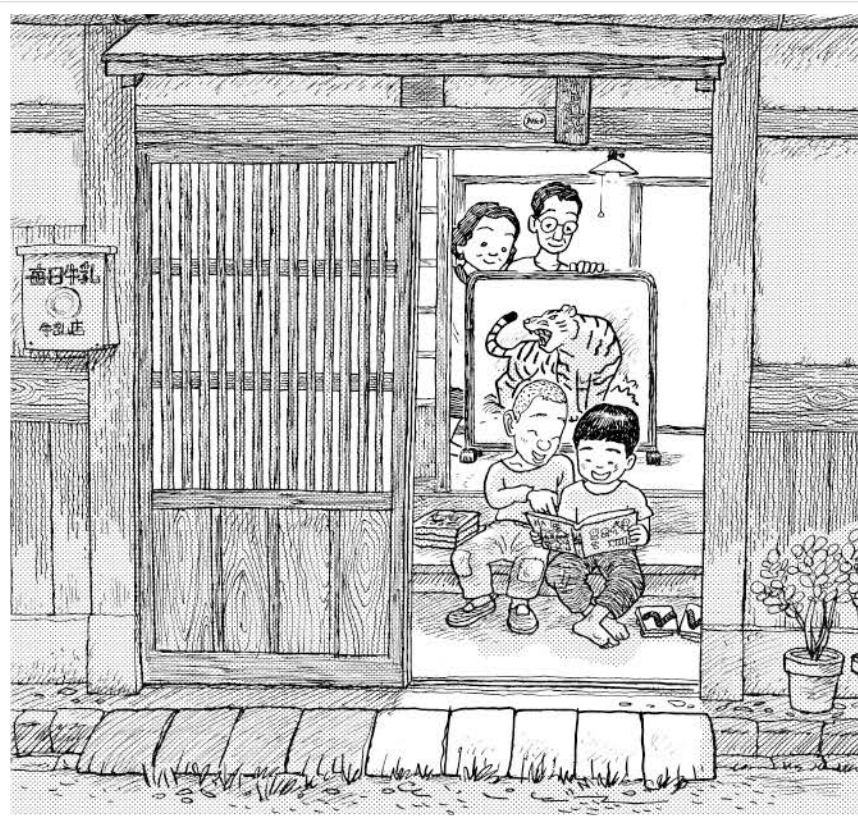
東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

■マンガがくれた友情

あれはわが家にテレビが来る前の年のこと、僕は八歳。近所の男の子達は家の前の路地や約 200 メートル離れた西ノ口公園などに行き、馬跳び、ビー玉遊び、ソフトボール、集まった人数に合わせ様々な遊びをした。

一方のアトムは人型人工知能ロボット、愛らしい少年の姿にもかかわらず大きなバスや汽船でも軽々と持ち上げるパワーを持ちながら、立ちふさがる敵と出来れば闘いたくないと悩み続ける。



(無言で一緒にマンガ誌を読むI君と僕)

力の強いロボットが人を傷つけることを禁じたロボット法について語られるなど、手塚作品は、子供マンガの領域を超え、差別や社会問題も子供に考えさせる通常の子供マンガの枠を超える啓蒙性の高い作品だった。ただ、月刊誌発行直後の4~5日ぐらいは、本命の「少年」は、他の子供に借りられた後でガッカリ、仕方なく別の月刊誌で辛抱したものだ。

ある日、公園で集団遊びに参加していた時、誰かが「あいつまた来よった」と言うので見ると、坊主頭のI君だった。わが家から7軒ほど東の同じ長屋の棟に住んでいた。当時聴覚障害者と呼ぶ差別的な言葉があり、それを皆で囃しながら叫び、さらに両手を鼻の前でつなぐように動かす変なサインがあった。まわりの子がするのにつられて意味もわからずマネをしながら僕も跳ね回った。するとI君が動物のような叫び声をあげて子ども達を追い回した。

各家庭にテレビが普及し始めたのは、元天皇明仁(あきひと)様と元皇后美智子様のご成婚パレードのテレビ中継があった1959年ごろからだ。

この頃わが家にやって来た白黒テレビは玄関の二畳間にデンと置かれ、夕食時にはいつも複数の家族が前に座りこんでいたので、これから話す聴覚障害者のI君との二人だけの静かなマンガ鑑賞エピソードが、テレビが来る以前だったのは確かな記憶だと思う。

当時の僕の楽しみは貸本マンガ、東成区の自宅近辺には貸本マンガ店が複数あった。そして毎月始めに店頭に並ぶ「少年」「冒険王」「少年画報」など複数の月刊誌を借り読みふけた。

真っ先に開くのは「少年」(光文社)連載の人気作品「鉄人28号」横山光輝作「鉄腕アトム」手塚治虫作だ。少年探偵が操縦する巨人口ロボット鉄人には意志がなく、操縦者が善人でも悪人でも関係なく敵を倒すところが単純だがスリリングで、操縦機の奪い合いにハラハラドキドキさせられた。

と、突然僕のこめかみに激痛が走った。見上げるとI君と同じような坊主頭のおじさんがこちらを睨みつけて仁王立ちしていた。痛むこめかみをおさえつつ、すぐ後ろめたい気持ちで黙ったまま僕はその場に硬直してしまった。

その日以後、僕は近所の子どもの集団遊びに参加しなくなった。I君とどうやって仲直りしたのか記憶がハッキリしないのだが、I君が自宅にふんだんにマンガ月刊誌をストックしていて僕がマンガ好きだと知ったI君が、その月刊誌やマンガ単行本をもってわが家に来るようになり、玄関で二人並んで同じマンガを読むようになった。

食後の食器を洗ながら「I君とあんたら、いつも静かやなぁ」と母が感心したようにつぶやいていた。

やアにみ日記
東成区の昭利

(350) お嫁さん



やアにみ日記
東成区の昭利

(351) お嫁さん



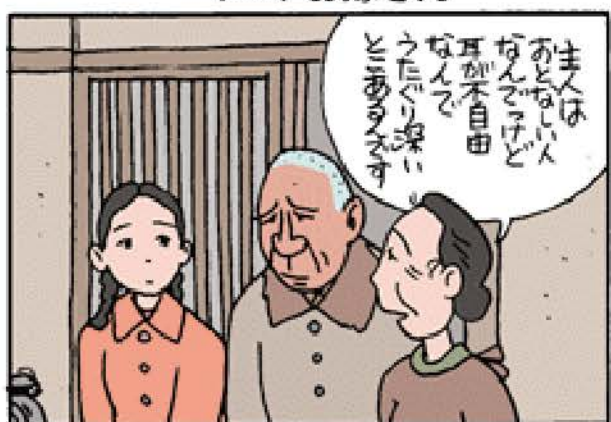
やアにみ日記
東成区の昭利

(352) お嫁さん



やアにみ日記
東成区の昭利

(353) お嫁さん



やアに浜日記
東成区の沼利

(354) お嫁さん



やアに浜日記
東成区の沼利

(355) お嫁さん



東成区の沼利



(358) お嫁さん



東成区の沼利



(359) お嫁さん



